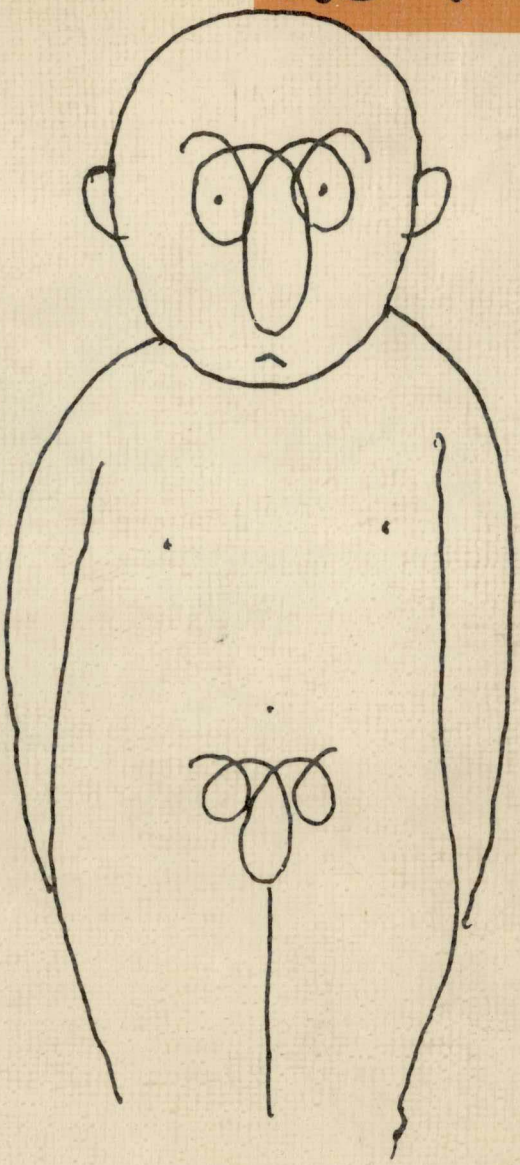
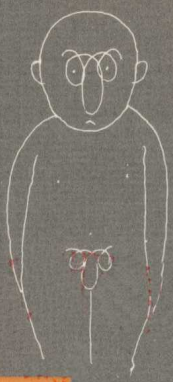
おやじの説教

なだいなだ



おやじの説教



なだいなだ

潮出版社

おやじの説教　　定価 930 円

1982年10月12日　印刷
1982年10月25日　発行

著者　なだいなだ
発行者　富岡勇吉

〒102　東京都千代田区飯田橋3の1の3
発行所　株式会社　潮出版社
電話（230）0781（編集）　振替東京5-61090
（230）0741（営業）

印刷・明和印刷　付物・栗田印刷　製本・東京美術紙工

落丁・乱丁本はお取替えいたします。販売窓口あて御郵送下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
© I. Nada, 1982 Printed in Japan

おやじの説教＊目次

一、誰のために説教をするか？ 7
二、新聞の読み方についての説教 11
三、いつまでもあると思うな、親と… 19
四、だまされたと怒るべからず 27
五、学問すべし、勉強すべし 31
六、恩は売るものにあらず 43
七、まさか、でも軍国主義がにおう 55
八、運と不運、それに不謹慎について 67
九、愛国心についての説教 79

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十、道徳教育について 91
十一、暗殺者になるなかれ 103
十二、言葉と真理について 115
十三、言葉づかいについて 127
十四、生き残ることと負い目の関係 139
十五、人間とは何か、内面に目を向けよ 151
十六、人間が頼りになるのは学より術 162
十七、好きな考え気になる言葉 174
あとがき 186

装訂　菊地信義

おやじの説教

娘たちよ、おやじはこれから説教をしようと思う。おどろくなかれ――といってもおどろくだろうが――なんと説教だ。

わたしたちに、なにか不満があるの？　お前たちは、そういいたそうだな。でも、子供のやることに不満があって、おやじが説教すると思ったら、まちがいだ。そんな理由で、おやじが説教をするものか。

そりゃ、おやじは、お前たちに不満がないわけではない。だが、そのために説教するなら、なにも今まで待ちはしない。とっくの昔にやっている。しかし、お前たちも認めるだろうが、このおやじは、これまで、うるさく説教をしたことは、ほとんどなかった。子供の欠点がなおしたいなら、説教なんて、一番効果が薄いと知っていたからだ。

一、誰のために説教をするか？

なぜ、効果がないか？　お前たちにも、すぐわかっているはずだ。

まず、お前たちは、おやじの説教をおとなしく聞いているような手あいではない。わかっとる。わかっているのだ。そもそも、お前たちは、このおやじの娘たちではないか。そして、このおやじは、なにをかくそう、大の説教ぎらいだったのだ。お前たちが説教ぎらいだって、バラの木にバラの花の咲くようなもの、ちっとも不思議はない。

その昔、おやじが、おやじのおやじから（と書けば複雑だが、つまりお前たちのじいさんからだ）、説教されていたときのこと、こんなこともあった。その日の説教のテーマは、「ひとの身になって考える」だった。じいさんはいった。

「いいか。人間はなにごとによらず、ひとの身になって考えることが、大切なんだぞ」

それを受けて、おやじは答えたもんだ。

「はい。それはきっと、父親になっても大切だと思います。おやじさんも、むすこの身になって考えたらいいですねえ。すると、むすこが、説教にあきあきしていることが、すぐにわかりますよ」

じいさんは、すぐに説教をやめてくれた。そのかわりにゲンコツがとんできた。

さて、次は？　聞くのがそういうお前たちなら、話すのはこのおやじだからである。そもそも説教なんてものは、えらいえらい、徳の高い人がやってこそ、説得力があるのである。ことおやじみたいな、だらしない、だめ人間の代表が（少なくとも、家の中での評価はそうなんだが）えらそうに、お前たちに、ああしろこうしろ、とのたまわっても、ぜんぜん迫力がない。迫力がなければ、説得力もないのが道理である。お前たちをよくしようと思うのなら、こんなおやじが説教しても無駄だ。ほかの人にたのんだ方がいい。

どうだ。このおやじ、自分をよく知っておるし、お前たちのことも知っとるだろう。

そういうわけで、おやじはこれまで、説教らしい説教をしてこなかったのである。つまり、無駄なことはしないのが経済だ、と思ったのである。お前たちよ、これまで説教されなかったのは、自分たちがおやじに、まあまあだと思われていたからだと、思ったら、大まちがいだぞ。うぬぼれるな。

それはそれでわかったけど、じゃ、それなら、どうして今？　お前たちは、そういいたいだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ろう。わかるのだ、このおやじには。

では、質問する。おやじが説教するのは、子供のためだと、ほんとに思っているのか？　もっと単純になれ。といっても、単純になるのは意外とむずかしく、つい今しがたまで、おやじだって、そう思っていたのだ。おや、いってしまった。こんなことは、白状しなくてもいいことだった。

ともかくもだ、おやじもそう思っていて、子供に説教する世の中の他のおやじたちに、無駄なことをしとる、と皮肉な視線を向けとったのだ。だが、つい今しがた、おやじの頭にはひらめくものがあって、悟ったのである。

世の中のおやじたちが、無駄と知らずに説教していると思ったのは、このおやじの考えの不足であった。自覚しているにせよ、自覚していないにせよ、世の中のおやじたちは、子供のためなど考えずに説教してきたのだ。つまり、説教したいから、説教していただけなのである。

こう悟ってみると、これまで矛盾だと思っていたことすべては、氷のごとくとけ去ってしまった。説教は、自分のためにするものなのだ。自分自身をふるいたたせ、自信をとりもどし、確信を深めるためにやるものだ。子供はといえば、見かけとはちがい、おやじの説教を聞くために生まれてきたのだ。そもそも、他人が、つまらぬお説教を聞いてくれるわけがない。愚にもつかぬ説教など、子供ぐらいしか聞くものはいない。だから、おやじは、説教を聞かせる相手として、子供をつくったのだ。

こう考えて、世の中を見てみろ。じつにすっきりしてくる。無数のおやじが、子供をつかま

えて説教している姿を見ても、もう、なんであんな無駄なことを、などという疑問で、視野をくもらされはしない。ごくしぜんな風景だ。

そういうことなのだ。おやじは、ただひたすら、説教がしたくなった。だからお前たちは、がまんして聞かねばならぬ。聞くふりだけでもしなければならぬ。

つらいことだろう。同情するぞ。だが、お前たちは、これまで、いい聞き手になることを、学んでこなかった。自己主張し、自己表現することばかり、練習してきた。このあたりで、ちょっと聞き手になる練習をするのもわるくはなかろう。なにしろ、話し方を教えてくれる人はいくらでもいる。しかし、聞き方の訓練は教えてもらえない。とすれば、これはいい機会だ。ま、そう思ってあきらめろ。

そして、おやじの、五十すぎての精神の健康法である説教を、聞くがよろしい。

さあ、これからが説教だ。

まず、おやじは、説教上の強敵、新聞について話そうと思う。

お前たちは、新聞に書いてあることと、おやじの話すこととくらべると、どうしても新聞を信じがちである。だが、現代で、いちばん注意してつきあわねばならぬのが、新聞である。ことに、最近、新聞は説教くさくなってきたが、その分だけ警戒しなければいけない（新聞ばかりでなく、テレビも週刊誌もそうだが、やたらと説教くさくなってきた）。

すりたての新聞をひらくと、プーンと印刷のインキがにおう。あの気分はわるくないが、説教のにおいがプーンというのは、いただけない。そのあとから、正義感なんてものがにおいだしたら、ぜんそくが起きそうな気分になる。正義感など屁のようなもので、腹におさめておけばいいので、外に出してにおわせるのは反対だ。

二、新聞の読み方についての説教

新聞は報道していればいい。お説教は、世のおやじどもにまかせておけ。新聞が出しゃばることはないのだ。

おや、これでは新聞をつかまえて説教しているみたいだ。

そもそも新聞は、自分で自分をほめすぎ、そして自分のほめ言葉に酔ってしまっているようなところが見える。なにしろ、真実を報道するのが、新聞の使命だなんて、ぬけぬけというとは、いい心臓だ。

おやじの考えでは、新聞は、もっと謙虚になるべきだ。たとえば、

「しがねえ新聞記者のいうことですが、ま、聞いてくだせえ」

という感じが、新聞の態度にあれば、この世の中は、もっともっと、平和になるのではないかと思う。読者が、新聞は真実を報道する、という宣伝を信じこむのなら、それはいたしかたない。世の中には、なにしろ信じやすい人たちが多いのだから。だが、新聞記者が、自分のいうことを本当に信じては困る。どうやら「しがねえ新聞記者」タイプの新聞人が減り、真実に奉仕する使徒といった、胸もはれば、肩もいからせる新聞人が多くなったような気がしてならぬ。

新聞が真実を報道するというのが、きれいごとすぎるなら、どう考えればいいかだ。やさしく考えるがいい。そして、やさしく表現してみろ。

新聞はニュースを売る商売をしている？　よろしいそのとおりだ。自動車会社が自動車をつくり、電気製品の会社がテレビや冷蔵庫をつくって売るように、なんのことはない、新聞はニュースを売っているのである。たまたま、ニュースの材料が真実というだけのことだ。真実は、ニュースの材料にしかすぎない。鉄を材料に自動車の箱がつくられるように、それはニュースに加工されるのである。ニュースは真実そのものではない。いわば加工されて売り物になった真実だし、売れるぞと思って選びだされた真実だ。そのうえ、さらに「見出し」という派手な包み紙がかけられて売られる。

いいか、そう思って新聞を見れば、事件と自分の間に十分に距離もおけるし、商品と消費者

の関係に立って、ニュースの品定めもできるというわけだ。ありがたがって読んでいるのが誤解のもとだ。

さて、新聞を読むにあたって、これから具体的な注意を与えていこうと思う。

まず、今の新聞を読む時、お前たちは、百行で書かれたものを、一行に書きなおす努力を、頭の中でやらなければいけない。

おやじの考えでは、新聞が、やたらとページ数をふやしたことが、現代の不幸のはじまりである。ページ数の少ない時は、新聞記者は、なるべく短くまとめるべく努力した。かくして事件は、あらゆる無駄がはぶかれた姿で、人々の前に現れたのだ。新聞と小説家の分業ができていて、新聞が三行で書いたものから、小説家たちは一冊の小説の本を書いた。新聞の一行から、評論家は一編の評論を書いた。

ところが、紙面がふえ、しかも平和が続き、たいした事件がないものだから、どうしたって、以前のような文章で書いていたら紙面が、余白ばかりになりそうな状態になった。さあたいへんだ。そこで新聞は方向転換。小説家との分業協定をやめ（それでおやじが腹を立てているというわけではないんだが）新聞記者が中途半端な小説や評論の文章で、余白を埋めるようになった。まちがえるでない。事件の記事を、そのように書きはじめた、というのだ。

というわけだから、お前たちは、百行読んで、それを一行に圧縮するという、めんどうなことしなければいけない。

それから、お前たちは、新聞の使う言葉に注意しなければならない。これからおやじのいう

ことは、なかなかもって、重要なことだぞ。

たとえば、同じ真実でも、あまりに私的なことはニュースにならない。だが、公的なものに錯覚させればニュースになる。そこで、紙面を埋めるために、言葉をいいかえることでニュースを、つくりはじめたのだ。

その一例が「登校拒否」というしろものだ。昔だって、学校に行かない子供はたくさんいた。行きたくても、家庭の事情で行けない子供もいたし、学校がつまらない、きらいだという理由で行かない子供もいた。後者は、おやじの時代では「ズル休み」と呼ばれていた。「ズルける」などという動詞もあったから、かなり身近な表現だった。昔の小学校の生徒の心を、さんまやあじのひらきのように、ひらいて見たら、だれの心にも「ズル休みしたい」という気持ちが見つかるだろう。

そりゃ、ズルけて、それがわかれば親に叱られ、先生からも説教をくらった。しかし、それはどこまでも私的な体験で、ニュースになど、なるしろものではなかった。

だが、同じものを「登校拒否」と呼んでみろ。お前だって、なにか一瞬のうちに事情が変わったのを感じるだろう。これはもう「事件」である。自分たちのこととして問題にしなければ社会問題だ。ことば一つで、こうも印象が変わってしまうのだ。

こうして、昔はニュースにならなかった「ズル休み」が、「登校拒否」と書かれた立派な包み紙にいれられ、立派な売り物のニュースになった。それを、

「あざやか、おみごと」

などと、ひやかすだけの余裕が読者にあればいいが、マジメな読者たちは、集会を開いて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com